

早野実花さん、藤川純子さんからお話を聞く会に参加して

2021年8月28日(土)、29日(日)

〇〇〇

1. ふれあうことから始まる——海外ルーツの方々とのかかわり 長坂優希音
2. 自分からかかわる——学びの環境を整えることの大事さ 寺澤朋花

〇〇〇

1. ふれあうことから始まる——海外ルーツの方々とのかかわり

長坂優希音

外国人市民と地域とのかかわり

8月28日、四日市・笹川地区の日本語教室Vivaあみーごの運営に携わられている早野実花さんからお話を聞く会に参加しました。笹川地区には、ブラジルを中心とした海外にルーツをもつ人びとが多く住んでおり、四日市市多文化共生モデル地区となっています。そのため、現在は、多文化共生モデル地区の日本語教室として四日市市から委託を受けVivaあみーごを運営されているそうです。Vivaあみーごの運営において、地域活動への参加など地域とのふれあいを大切にしている、というお話が印象的でした。笹川地区には外国人市民が多いということで、周りに海外ルーツをもつ人がいても私たちが思うほど不思議ではないのかもしれませんが、やはり、外国人市民の方々が地域との活発なつながりを持つ環境を彼らと一緒につくっていくことがとても重要なのだとあらためて気づかされました。また、Vivaあみーごでは、地域の人々を対象にさまざまな国の文化を紹介する国際理解講座を実施しているそうです。学習者の方々が日本について知る受け身の学びだけでなく、紹介する立場として海外の文化を広めていったり地域の人々と関わりをもったりできることに魅力を感じました。多文化共生を目指すために、このような、日本に住む人びとがお互いを感じて、知って、尊重しあうきっかけが、これからの社会でますます必要になってくるのだと思います。

多文化共生モデル地区の日本語教室として、ただ日本語を教えるだけでなく、地域とのふれあいの機会を大切にされているVivaあみーごについてお聞きすることができ、大きな学びとなりました。私がボランティアとして参加している日本語教室にほんごかふえでも11月28日にフォーラムを企画しているため、この日得た気づきを取り入れていきたいと思っています。

子どもたちがお互いを認め合える環境

8月29日、ブラジル人児童が多い笹川小学校の先生をされている藤川純子さんからお話を聞く会に参加しました。藤川さんは、JICA日系社会青年ボランティアとしてブラジルで日本語教師をされていた経験をおもちです。日本語を教える傍ら、現地の学校に聴講生として通い、ポルトガル語をさらに猛勉強されたそうです。このお話を聞いて、藤川さんの、ご自身の学びにとってもアクティブで、日本語教師の活動に対しても、とても真摯により良い教育を追求されている姿に感銘を受けました。このご経験が、子ど

もたちの母語や文化をよく知っているという点で、現在の笹川小学校での教育に繋がっているのだと思います。実際、私もボランティアとして参加している日本語教室の授業で、英語を使うことがあります。理解しにくい単語や文を英訳して学習者の方に伝えたり、逆に、学習者の方から日本語にあった英単語を伝えてきて、こういう意味か、と確認してくれることもあります。私自身完璧に話せるわけではないですが、少しでも拠り所があると学習者の方も安心して学習されているのが分かります。藤川さんのお話の中で特に印象的だったのは、日本や日本語を理解させることだけを意識するのではなく、子どもたちの母語や文化、アイデンティティーを大切にしたい、お互いを認め合えるようにしたい、というお言葉です。海外にルーツをもっていることや日本語ができないことを問題であると捉えてしまうと、1997年に愛知県小牧市で起きたエルクラノ君殺害事件のような、差別が原因の悲しい事件につながりかねません。また、彼らも持っている素敵な言葉や文化を押しつぶしてしまうこととなります。笹川小学校の海外ルーツをもつ児童たち、日本人の児童たちには、就学前の幼い頃から一緒に、各々の違いが存在する環境で育ってきた子も多くいるようです。笹川小学校でも、外国の言葉やお互いの文化との出会い、地域を知ること、歴史から差別を知ることなどを大切にされています。幼い頃から世界の多様性に触れることができる、とても素敵な環境だと強く感じます。また、すべての子どもたちが多様性に触れ、お互いを認め合って育っていける社会が必要なのだと改めて思いました。

海外ルーツをもつ子どもたちの教育に携わられてきた藤川さんのご経験や想いをお聞きすることができ、日本語教室のボランティアや学童保育のアルバイトをしている身として、大変勉強になりました。また、藤川さんには、にほんごかふえのボランティアをご紹介いただき大変感謝しています。

〇〇〇

2. 自分からかかわる一学びの環境を整えることの大事さ

寺澤朋花

私は、8月28日、29日と四日市で多文化共生の取り組みにかかわる早野実花さんと藤川純子さんとZoom上ではあるが、交流する機会を頂いた。早野さんからは、四日市にかかわるきっかけとなった背景、アドバイザーというかたちで運営にかかわる日本語教室「Vivaあみーご」や新しく立ち上げられた株式会社ジャパンリビングサポートについてのお話を伺い、藤川さんには、JICA日系社会青年ボランティアと教師の経歴から、海外ルーツの子供たちを含めた教育に関するお話を伺った。私は、お二人との交流は2回目であり、四日市について興味を持ち、四日市の多文化共生の取り組みに私自身がかかわろうと思ったきっかけを作ってくれた方々でもある。その結果、私は現在、四日市の日本語を教えるボランティア団体「にほんごかふえ」に所属している。さらに、前回の交流との大きな違いは、私が受身ではなくなった点だ。前回、私は全く四日市のことや多文化共生についての知識がなかったため、お話を聞き、それについて感じた疑問を述べることしかできなかった。しかし、今回の交流では、私自身が日本語ボランティアの活動を通じて、お二人に聞きたいことや私が学んだことの共有など主体的に交流できたことに成長を感じた。

今回の交流を通じて、あらためて海外ルーツの方が日本で生活するにおいて、語学を学ぶ環境を整える必要性を感じた。私は、藤川さんのお話の中で、日本に来る技能実習生に日本語を教える制度がないという事実に驚いた。技能実習生の来日は、日本の企業にとってもメリットがあるにもかかわらず、語学能力が低いまま仕事をこなすことに私は疑問を抱いた。そこで、笹川地区を多文化共生モデル地区と定めた四日市でも、このような問題を解決するために夜間中学校の試行運営をこの夏から始めたそうだ。夜間中学校の運営が開始されたことで、学びたい人が働きながら通えるメリットが生まれる。そして、この夜間中学校が日本語能力の低い技能実習生などの外国人の受け皿になり、語学力の向上に繋がると予想される。また、早野さんのお話の中で、新しく設立した株式会社ジャパンリビングサポートでは、海外ルーツの方の語学力の問題で、病院に行く際に医療通訳としてサポートをされていると伺った。そして、日本に住む外国人が増えているにもかかわらず、医療通訳における人材が少ないという事実に加えて、患者が重病の場合、通訳する側の負担が大きいという問題点があることを教えて頂いた。夜間中学校のような学びを得る機会があることで、患者自身がいずれ直接的に診断結果を聞くことが可能になり、医療通訳の負担の軽減にも繋がると感じた。さらに、日本語能力が上がることによって、技能実習生などは正社員を目指すことも可能となる。

つまり、今後も多文化共生社会を発展していくために、夜間中学校のように海外ルーツの方が母国語以外を学ぶきっかけや学べる環境づくりをすることが重要だと感じた。そして、自分がかかわる日本語ボランティアも夜間中学校のような学びの機会を提供している一種の取り組みであると認識した。そのため、今後も誇りを持ち、私自身取り組んでいきたいと思った。